

小説刺激によるワード文章発生からの本人記述への心理学的考察、記録性への評価

Awareness about Novel in Internet and Recognition Novel as effect stimulus in Word writing, analyzing psychological matter

糸魚川幸宏
ウィズダム・インク

要旨：小説の刺激は読書、文学館、愛好者との会話で得られ発信しているホームページによって borderless な環境で発信されている。こうした本人記述は心理学的知識により自伝的記憶の再構成というような編集ができメディアコンテンツへの進展、文学研究者の研究刺激により HCI での uncertainty 状況へのガイド、旅行コンテンツへ文学史的視点をいれることを可能にした。本人記述を事例に小説刺激によるコンテンツ分析、情報処理、文学研究を評価に用いた。

キーワード： 自伝的記憶 旅行記 HCI uncertainty 文学史 記述の解

Abstract： Handout had stimulated homepage writing and new thought is born as psychological content recognized in common scientific knowledge. Case study has made clear new analyzing on writing for homepage and new type of novel coming up.

Keyword： Writing, Novel, Homepage, Solution

1. はじめに

ホームページは個人発信もあり本人記述で作成されている。Blog、電子掲示板、ツイッター、Facebook、Linkedin の利用の中で本論文で文章記述の考察対象にしたホームページでの本人記述は電文、短文体から想起記述、刺激記述、テーマ記述、主役的人物設定による記述という記述の性格で分類された。プロバイダー利用によるホームページ発信は 1994 年からでプロバイダー数は現在 3 社、発信のホームページの特徴でプロバイダー利用が分けられている。

2. 方法

ホームページ分析には情報処理学会での交流で見聞した専門用語、情報処理の手法を用いた。事例記述の分野では日本心理学会、日本社会心理学会、東海心理学会における事例研究を土台とした（論文、ポスター）。

本人記述は 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災から記述が増えた。1992 年秋から情報処理学会、日本心理学会などにおいて論文発表するようになったがデータはアンケートに対する記述データであった。記述データが本人記述に変わったのはメール利用におけるセキュリティの問題からである。本人記述には心理学的知識による検討を加えデータの信頼性を維持するようにはかった。記述には英語による海外か

らのメール文もある。メールなどの通信手段には「コミュニケーション」分析を行なった（電子情報通信学会）。

3. 情報処理の進展

3.1 Awareness 小説とエピソード

日々ふれる情報の中で小説に関する記憶が町、対人関係で起きホームページ記述において 1 つの要素をしめてきた事実に気づいた。小説の分野はパルプフィクションで事例想起の場所は横浜の港北新興住宅地で時期は昭和 61-64 年である。ホームページの 1 つの性格に町、企業などの広報誌に似た情報の提供への反応が記述がある。広報誌、小説、小説家とホームページ記述との関係をみる。**事例：** 横浜、電鉄会社広報誌の写真記事「佐藤愛子」、知り合いが愛読、知り合いのこのホームページでの記述で佐藤愛子のことが出て知り合いのマスターズ挑戦、ドンフライヤーなどの選手の話が記述に出る（表 1）。他の小説家を話題に出した人のことは思い出し記述へのストックになる。小説への検索で情報をためておけばホームページ記述がうまく多く書ける。

名古屋でみると広報誌が町での情報を提供し記憶される人物があり社会心理学論文で作った大学の群で再認される。俳優も記憶にあり名古屋で講演した人の話題からの記述も

生まれる。名古屋市内白壁に文化の家があり女優川上貞奴の記録がある。城山三郎の展示が一角にあり城山義弟の講演の「城山三郎のもてなし」を聞き記憶再認のもてなしを受ける。川上貞奴、城山三郎、ホームページ記述が対人関係からホームページ記述を生む。直接、城山三郎の講演を聞いて話題にして相手の反応を記述でカテゴリー「会社職場」のhtmlにすることができる。ホームページ記述は町、スポーツ、会社職場という形でそれぞれ記述が展開しワードで語数管理を行なうファイル管理に発展する。こうした記述の場合小説にふれている人の記述に実名でよいかどうかの記述抑性が出てくる。

神戸で広報誌に期待したのは1908年来日し神戸に10日滞在したFinlandのMannerheimの情報であり調査のきっかけとしてのMannerheimの中国での情報、日本への航路、神戸での旅館記録であった。HelsinkiでのMannerheimの家で得た情報が神戸での調査を生んだ。Finlandへの旅行前には横浜の図書館で「くし」というFinlandの小説を知り(横浜山内図書館)Finlandを知る有効な小説となりFinlandの人と話す話題、ホームページ記述に出る内容となった。Finland向けのホームページは最初Helsinkiでマイクを持った女性に会ったことから写真を入れたホームページを作ったことから始まった。ホームページにはblog、ツイッター、Facebook、Linkedinの要素と小説記述的要素、テレビ的メディア性が生まれた。Mobileとコンテンツの利用で他に広報誌には旅行、ウォーキングに関するものがあり文学館への案内、町の小説家の紹介をするものがある。横浜、大仏次郎、吉川英治、岐阜県中津川市馬籠、島崎藤村、金沢、徳田秋声、福岡「福岡北九州に強くなる③」(福岡シティ銀行編)などで小説家の記録を知ることができる。これらは現実の存在からホームページ記述を生んでいる。

3.2 Bumped fact

インターネット時代にスーダンからOslo、Amsterdamに学んだBen Danielは偶然の出会いの重要性を論考した。さらにBen Danielの研究のKeywordsは検索でvirtual communities /social capital /Bayesian belief network intercultural collaboration awareness trust social protocols

knowledge sharing とフォローできるがホームページ記述の特性として一過性、一時のglanceという情報発信であることが認知されていることが大事と考える。この考えから

小説のある町の図書館というものを考察する。

3.3 町での心象と小説の理解

町での人の見かけが起きた時にその後小説を読んで全く場所、状況が違うのに見かけの理由に腑に落ちるものを感じることがある。具体的に何月何日と特定できないが昭和の61年から64年頃とみることはできる。小説はpulp fictionで「死角」、ブロンジーニが思い出される。この時期はワードはまだなく思ったことはワード文章にないが記憶は残り大分経った2014年American Pulpの著者の講演を聞いて見かけのことを再認する。

再認の時期にはテレビのdirectorの講演を聞いてドキュメンタリー作りのシナリオのような文章が生まれシーンがプロットされる。町での見かけは1人でなく1人の見かけは3回ほどか思い出される。見かけには異常さも感じられる光景があるからホームページに時間をかけて30年経ち記述されることがある。

3.4 図書との出会いと記述の開始

情報の世界 図書館での刺激

図書館での図書との出会いで日々のワードでの想起記述が出ることもある。

具体的に「政治の代償」(ボブ・ウッドワード)の文中の言葉で自己体験が記述できた。この記述で時代も場所も違う職場が記述でき、また時代も場所も違う小説「点と線」を読み得ることが出来る。この事例はパソコン、インターネット利用の日々での人文科学とコンピュータのテーマと考える。日々のワード打ちはweb日記、心理学という自伝的記憶の記述のカテゴリーに入る。図書の刺激による想起記述は日本の小説、海外の小説で生まれている。文学研究家の言葉はpoem logic、pulp fiction、「大地震記録は小説で残す」の枠組みを与える。小説での記述を現実に見た人物の表情で信ぴょう性を吟味したのは1990年代である。

目的、作業: 人名、コンテンツ検索が可能な小説などの記述物からの刺激による本人記述を点検、その意味することを情報処理で捉え記述作品としての止揚までを考察する。

4. コンテンツマネジメントと市場

広報誌、図書	小説を話題にした人の話題	ホームページ記述	小説連想、コンテンツ
電鉄、佐藤愛子	マスターズ ドンフレイザー	旧宅近くで大地震の揺れ	蒲田行進曲、他小説スポーツ
観光、宮沢賢治	ML 案内のホームページ	花巻盛岡旅行記	萬鉄五郎絵葉書、エピソード
書店、消されかけた男	アガサクリスティ	Big data での愛読者生起率	ベルリンの壁、友人、講演
図書館、米財務長官 3 点	アテネ、名大、立命館大個別	言葉、状況での引用記述	DARK POOLS、panic 事例

表 1：広報誌、図書館での図書による情報、現実の想起

4.1 メディア性と小説

社会心理学の論文で「都市の心理的風景」を連続研究し、いくつかの都市での体験的心象を記述データで入手し論文構成にした。大岡昇平の「事件」は現実に小田急に小田原から乗り移動した時に個人発信 html で記述される想起になる。町の見かけに小説的理解が生まれ、時間をおいて小説的理解が新しくできる。その過程は本人記述でホームページに記載される。ホームページの数は多くっており 1994 年からのいくつかの html カテゴリーで記述が生まれる。具体的に横浜市の新興住宅地での「事件」という認知での環境の見方と学生時代からの対人の消息への情報の流れの遮断がある。豊田穰小説の記述者の現実もある。

4.2 現実にいる小説に書かれた人物の検証

豊田穰は岐阜県本巣の生まれで海軍で終戦の後新聞記者となり小説家になった。関心は「四本の火柱」に書かれた椋島千蔵が東急田園都市線で小説の載った「オール読物」を紹介することで始まる。小説での記述に検証を感じ早稲田大学の心理学会で表情記述について考察した。ポスター発表（引用 2）での小説の分析、現実にいる人物と豊田穰「四本の火柱」、椋島千蔵 表情の記述 時間をお

いての人名検索で海軍記録、テレビコンテンツが出る。清河八郎、記述した小説家による違いを感じた。藤沢周平は鶴岡記念館で再認、柴田錬三郎は岡山文学館で記念展示を見た。清河は幻燈記録があり学会の研究会で PPT で表示、反応を得た。小説からの史跡見学はない。心理学的記述を講釈されたデータ記述提供者と愛読藤沢周平「回天の門」への所感、柴田錬三郎は斎藤姓で一族ということへの想起でホームページ記述が出ている。飛田穂州 早稲田大学図書館での引退までの記録で私のおじの野球を教えた竹内愛吉の野球部での存在の大きさを知る。これらはホームページで時に記述され本人の所感、人の読書所感、文学館での記念展示で記憶されるコンテンツとなる。ホームページの種類は鶴岡、岡山、岐阜、加茂と図書との出会いから文化のカテゴリーになる。岩手のホームページの場合、文化的なものが東北旅行記録で書かれているが東日本大地震で記述がその延長でむつかしくなり宮沢賢治を大地震後フランスが評価したことなど別の記述によるホームページ構成が検討される。

4.3 モバイル、見かけの心理学的論考の発生

Not car: 小説、町が心理学的に考察対象になることは横浜

小説家	学会 情報処理 心理学における討議	検索 html 本人記述	検索 pdf 連関
島崎藤村	対人関係分析のデータにした	中津川岡山 html	仙台、情報、重要さのテーマ
司馬遼太郎	池波正太郎と合わせ当時の職場心理学記述	中津川瀬戸の想起 html	名古屋研究資料が上海で検索
豊田穰	事件性への組み込み	岐阜愛知、心理学	Html 管理の html、小説と現実
徳田秋声	登場人物職業心理学的時代考察 linkedin	心理学想起初期 html	徳田記述におじいさんが出る人
Graham Greene	human computer instruction 記述に刺激	システム、心理学	大地震後の総理行動記述
ゲーテ	ゲーテのいる町 都市の心象	欧州旅行 写真	写真、短文で pdf 装丁
アンデルセン	Hypertext の学会	Usability HCI 研究	日本の Denmark 研究

表 2：検索検証における本人記述と小説家

市の新興住宅地に関し2008年に出来事を生む。抑制された記述がホームページに生まれテレビで見る人間の車で町の町での見かけが現実記述に生まれた。

「類似性のない不連続な出来事で思う現実的意味合いへの心理学的考察」(2006年会場福岡 JPA)

車で町の町での見かけ(元総理大臣、元野党党首、元プロ野球監督等)の心理学的考察は町での体験をホームページに記述することで記録となるが電文短文型で not car(車でなく現実に話したいの意)とカテゴリーされる。

映画刺激: 会社職場で文学的に気がかりの解決を pulp fiction という小説に求めたことは職場の時期が1970年(昭和45年)であっても30年時間経過し、海外学会査読メールに I regret という言葉が出たことの原因を30年ほど前の職場の記述、ホームページを点検することで見直しが始まる。1970年は11PMなどテレビの話題が職場で見られた時期でその角度でテレビの変化を産業・組織心理学会の論文テーマとして構成した。このタイプの記述は組織分析のhtml、ワードの語数管理へと進展する。新興住宅地での会社の教育施設、寮などとの住民環境検証記述の過程で時期はずれるがアメリカ映画の Pulp Fiction (1994年)、9 to 5 (1980年)の検索コンテンツが1970年職場を見るのに再認された。Html コンテンツのメディアコンテンツへの進展を意図する発想が生まれた。Html、pdf の発信がPPT、パワーポイントによってテレビ、映画性が出るという考えでシナリオ作りに html の文章が活用される。パワーポイントを活用した「インタビュー」のコンテンツがあり愛知工業大学の学生による「城をたてよ」(主役西田敏行、監督プロ)の映画作りがあった。

小説再認: 語数管理されたワード文章には2015年日本心理学会名古屋国際会議場でのポスターハンドアウトの刺激で自伝的記憶のファイルとして心理学的な考察対象となった。本人記述に居住した町の小説が出てくることになる。学生時代、中野居住、講演で大江健三郎、安倍公房、江藤淳、司馬遼太郎、「鑑真」協力で井上靖のこと、同人の人で五木寛之を話題にした人と出て小説そのものでなく人生の過程に話題に出た小説家記述としてホームページに載る。情報のフィードバックで海軍兵学校生徒・卒業生名簿を見た時に海軍の成り立ちで安倍公房の「榎本武揚」を思い出し想起記述につながる。

小説再認はパソコンがない1960年代-1970年代の短文の本人記述への見直しという心理学的考察にさかのぼる。社会心理学による Uncertainty, Panic, Disaster へ

の考察 本人記述の短文再考、キーワード選定によるデータ群設定からの時間経過認知 (2016年日本社会心理学会論文)では三段階の記述をポスター発表で説明した。想起の記述、テーマを設定し想起、刺激で記述、特定人物の設定で記述すること、想起、刺激が記述の始まりとなる。2008年のリーマンブラザーズ倒産の年の経済的問題への考察は「ウォール街のアルゴリズム戦争」(スコット・パターソン、日経BP社、2015年)により特定人物を想起、小説的に記述を生んだ。(例、S1, S2 と心理学的事例記述)

4.4 検索による小説家の記述における発生

ホームページは職場、町、旅行というカテゴリーで記述されている。検索という情報処理で多数あるホームページで記述したと記憶される小説家がどのように検索表示されるかをみた。サンプル的に小説家と検索ホームページ事例を表1に示した。

島崎藤村、インターネット考察、出身地中津川、文学館訪問岡山の地域、県のホームページ、コンテンツ提供システム、重要な情報への認知、情報処理、社会心理学の論文 pdf で見られた。東日本大震災に特定人物として島崎藤村を設定し新たにワード文書を起こすことができる。

司馬遼太郎、サラリーマンに人気のある小説家で岐阜県中津川市、愛知県瀬戸市に特定したホームページで検索され心理学にカテゴリーされるホームページでも見られた。「名古屋研究」の説明文が上海のコンテンツ紹介ホームページで検索された。本人記述の自伝的記憶の記述として司馬遼太郎を話題にした先輩社員で文章を起こすことができる。豊田穰、小説に記述された人の「オール読物」掲載「四本の火柱」から知る。岐阜県出身で岐阜県立図書館に豊田穰文庫があり記述についての考察に情報源がある。森村誠一の「ミッドウェー」に計器についての豊田意見が書いてある。補償になった体験から小説記述について記述真意の確認記述を同県出身者として考える。

徳田秋声、情報処理の Groupware と networking の論文にみられ検索された。「調査ニーズ、状況再認にどこまで検索、コンテンツの信頼をするか: コンテンツ評価、制作」、英文タイトル、

Content Evaluation and Making Media Content From Content Assessment in viewing knowledge of Systems Thinking and Psychology to Media Content
金沢工業大学で行なわれたもので文学館訪問、それによる「あらくれ」の高峰秀子による映画化、「仮装人物」につい

ての新藤兼人の映画化したい意思表示のビデオなど見ることができた。「縮図」と合わせ三作品読んだが登場人物の職業による時代の理解、Linkedinなどの個人情報表示のソーシャルメディアの時代での徳田秋声作品の評価を記述したいと意欲がわいた。情報処理のAIのセッションで島崎藤村作品で対人の動きをみたという人と意見が交換できた。島崎藤村、司馬遼太郎、徳田秋声については文学研究でなく記述、検索から以上の次の記述動機が得られたことを記す。表2のグリーン、ゲーテ、アンデルセンについては次の文学研究者のハンドアウト刺激で考察後記す。

5. Mobility, Interactionとホームページ分析

5.1 文学研究者の研究発表での刺激生成

観光、旅行記、活動記録がホームページで制作されているhtml、pdfのコンテンツについて評価、制作品質向上などに有効であると考えられる文学研究がハンドアウトに見られた。

藤岡伸子「小島烏水のアルピニズム翻訳と言文一致ー風景生成と表現革新のダイナミズムをめぐる」のハンドアウトの関連年表には島崎藤村「破戒」が田山花袋「紀行文について」(無署名)と1906年、1907年と1年の違いを知ることができる。田山花袋は紀行文デビューは1896年、「日光山の奥」とある。樋口一葉25歳死去の年である。小説家刺激は会社職場で「蒲団」読んでいた人の自慢へと導く。1907年「蒲団」、読者1975年頃のepisode、I REGRETを海外学会査読メールから1970年公司職場記述に追ったようにこのシーンも自伝的記憶の記録では意味を持つ。ハンドアウトによりホームページではモバイルな木曾路観光外人が写真と一緒にユビキタスな感覚でhtmlに載せられたが木曾路の島崎藤村を同時代の田山花袋の記録と合わせ記述する方向が得られた。

高校の国語教師の授業での田山評価など自伝的記録のホームページに入れることも文学を1つの分野と考え行なっていけることである。htmlの構成要素に文学を入れた意識が記述に向上、進展を生むと思う。

1994年からのホームページ発信において学会での国内海外での移動、旅行、旅行者との出会いでMobilityのコンテンツが増加しIE研究者の「アメリカ旅行記」をpdfでOsloの心理学者の「ブラジル旅行記」などをhtmlで得られた。旅行ガイド的にStockholm発の日本人学生のhtml、メールマガジンによる海外旅行日記、9.11テロ後のア

メリカからのhtml、banner提供が記憶されるが発信に忙しく紀行文としてのコンテンツ提供は考えていなかった。ホテルでふれた異質文化の記憶はエッセイ風な記述を生む、他の想起文とある時点でjunctureを生み、別の事態の説明に記述が起きることがあり自然の流れで本人記述のもたらずものを自覚した。紀行文としてpdf ppt htmlが考察対象になる。juncture生起を思うと短文でも重視が考えられる。htmlには写真が掲載される場合がありphoto memory scene memoryがhtmlで出てくる。時間が経つと写真の意味合い等の解釈が起きて個人資産的デジタルアーカイブへの意識ができる。インターネット利用に旅行ではBach等がコンテンツとなりドイツ、イタリア、スペイン、デンマークの旅行でゲーテ、アンデルセンが旅行記で想起された。表2のゲーテはインターネット考察、ホームページ提供の方新、コンテンツリストのホームページに見られ特に写真等でpdfコンテンツが用意されている。アンデルセンもホームページ提供方針で人名検索されるが海外の学会でhyper textをテーマとした国際学会が途絶えたことがコンテンツ制作、アンデルセン交流に影響した。

方向：紀行文の文学研究者による研究ハンドアウトは旅行という事の記録としてインターネット時代にpdf、htmlによるコンテンツをリストアップさせる。このことは発信ホームページでの新しい社会現象を知ることになる。どこでもパソコンがあれば旅行での所感が書き込めるNiftyの「さくさく君」というものがありドイツなどでの旅行でBaden Badenなど書いていると東京で昼食時、Baden Badenがよかったなど知らない人がいうことがあった。

旅行関係のhtmlはまた美術館 大英博物館、町で会う人国際学会で会う人など分類することができる。本人記述で会社職場、国内移動でまたいろいろ小説、小説家の話題、旅行先近くに文学館など記述があり記述が追加できる。htmlの文章量は少ないが写真でhtmlが意味を出すこともある。

論文の分野でマンマシンコミュニケーションにおける友好感情生起の研究(情報処理学会)名古屋研究(東海心理学会)ヒューマンコンピュータインタラクションと9回以上の連続研究、関連論文の発生がある分野が本人記述でできた。htmlも岩手、静岡、岡山、山口・福岡と県、地域で作られ小説、小説家で記述が増える予定になる。

文学と関係してどのようにこれらの記述をみるかの問題があるが、心理学の考えで想起記述、テーマ記述、対象人物特定の記述と記述段階を作った。テーマの記述に東日本大

地震と菅直人総理大臣などラジオ放送の刺激を中心に記述することができたものがある。

Mobility のテーマの場合、Helsinki での Hemingway などエッセイ風書き出すテーマもある。Cuenca で会った Hemingway に似た人のことも書き出しはできる。こうした場合の記述に感情の生起が大きな影響を持つ。

コンピュータの分野で episode、情動知能研究との接触が生まれる。

5.2 文学研究者刺激 2 台湾舞踊の理解から HCI の理解

学会説明で出席者が「説明が書いてあるんじゃないか」と画面への漢字説明を言ったのは「林懐民の現代舞踊（コンテンポラリーダンス）の叫ぶ台湾史 小説から舞踊言語へ、星野幸代の説明に対してであった。個人の株式取引口座の使用中にパソコン画面に理解に苦しむメッセージがある。メッセージに従わないと通告が実施され被害が起きること、メッセージが時間で消えることなどある。画面の理解を助けるために通信機器、メール、電話、fax を使うことも起きる。台湾舞踊における小説家から舞踊家への転身の case study とみることもできる。舞踊 + 言語 + 画像の意味するものへの文学研究者の考察はヒューマンコンピュータインタラクション、パソコンにおけるホームページ利用、商用口座画面での usability、security を似た状況として想起させる。

これと別に台湾メディアについて世新大学の東日本大地震後の分析で日本で関心を寄せられた人物は石原慎太郎、菅直人、AV 女優という結果があり台湾のリーダーに対する反応が報告された。異なる文化での現実理解はホームページ文章にも起きる。

5.3 事例、HCI、著者、研究を知る場合

私の本人記述でワードが利用される前の原稿用紙記述に「システムデザインと人間行動」、「コンピュータの病理」というものがある。こうした 1970 年から 1980 年代、心理学はシステムと人間を次のように考えていた。

コンピュータシステムにおける人間を捉える場合、人間因子という見方、事故、機器の usability と人間の適合性をみることは長い歴史を持つ。文学 The Human Factors でコンピュータ環境、システムと人間を記述する場合はもっと記述が具体的でどこで何をを確認する場合、日記、メモ、学会記録など見直す必要性が出てくる。この記述が必要になったのは小説の文章の流れがよく翻訳「事件の核心」に

迫れると思ったからである。

心理学を人文科学、自然科学と考えるか対象分野で判断は異なるが研究方法として記述データを使うことで人文科学と考えた場合、状況における不安、恐怖を感じた記述データが事態究明のデータとして尊重される。この尊重時期は潜在的な感情の意識が小説による見かけ記述、Pulp Fiction での見かけへの納得性、小説の例えで人に言えるという事態に入る。例、江東区で聞いた行方均の都市伝説の話の不確かな事例で出すと話の流れができる。

5.4 記述による解の方向

通信と環境：東京の町がある。居住する横浜から距離がある。この間にメール、電話がある。個人情報むこう（証券会社）にはある。こちらには HCI 感情しかない。相手はどうしてる、不審、不安、恐怖。こうした感情はメールで出たもの、受発信システムで出たもの、電話で出たものと分類できる。事例には HCI での usability、証券会社のコンプライアンスの問題として証券会社、親会社、警察、弁護士とコラボレーションのない世界の問題となっている。

The Human Factors の人物を小説的に記述していく。他の html と link がかかるか、別の記述と juncture がかかるか。記述による事態説明の解がえられることがある。

人文科学とコンピュータの新しい課題として小説刺激から html 分析、事件性問題の解決を提起する。

引用文献： 著者糸魚川幸宏 文中タイトル挿入以外

(1) American Pulp : 自己記録 html、記憶一コマ場面分析からのドキュメンタリー、映画制作への作業考察

心理学手法を意識してのパソコン、携帯利用から一
<http://www2.u-netsurf.ne.jp/~wisdom/20151010content.pdf>

(2) 早稲田心理学年報 Vol.32 Mar. 2000 小説的記述の正確性と心理学的事例の発見、1999 年 5 月 29 日ポスター発表、早稲田大学心理学会第 24 回

謝辞

日本比較文学会第 7 5 回大会名古屋大学会場関係者見皆様
2013 年 6 月 15 日（土）16（日）

<http://www.nihon-hikaku.org/katsudo/katsudo1.html>
図書館でお世話の皆様